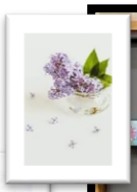
SUZUKA UNIVERSITY LIBRARY NEWS

2026 年度
6 月号

こんにちは！ 附属図書館です。

紫陽花が色づき始め、梅雨の訪れを感じる季節となりました。
雨の日が多くなり、外で過ごす時間が少なくなるこの時期、図書館でゆっくりと本に親しんでみてはいかがでしょうか。
みなさまのご来館をお待ちしております。

新着本

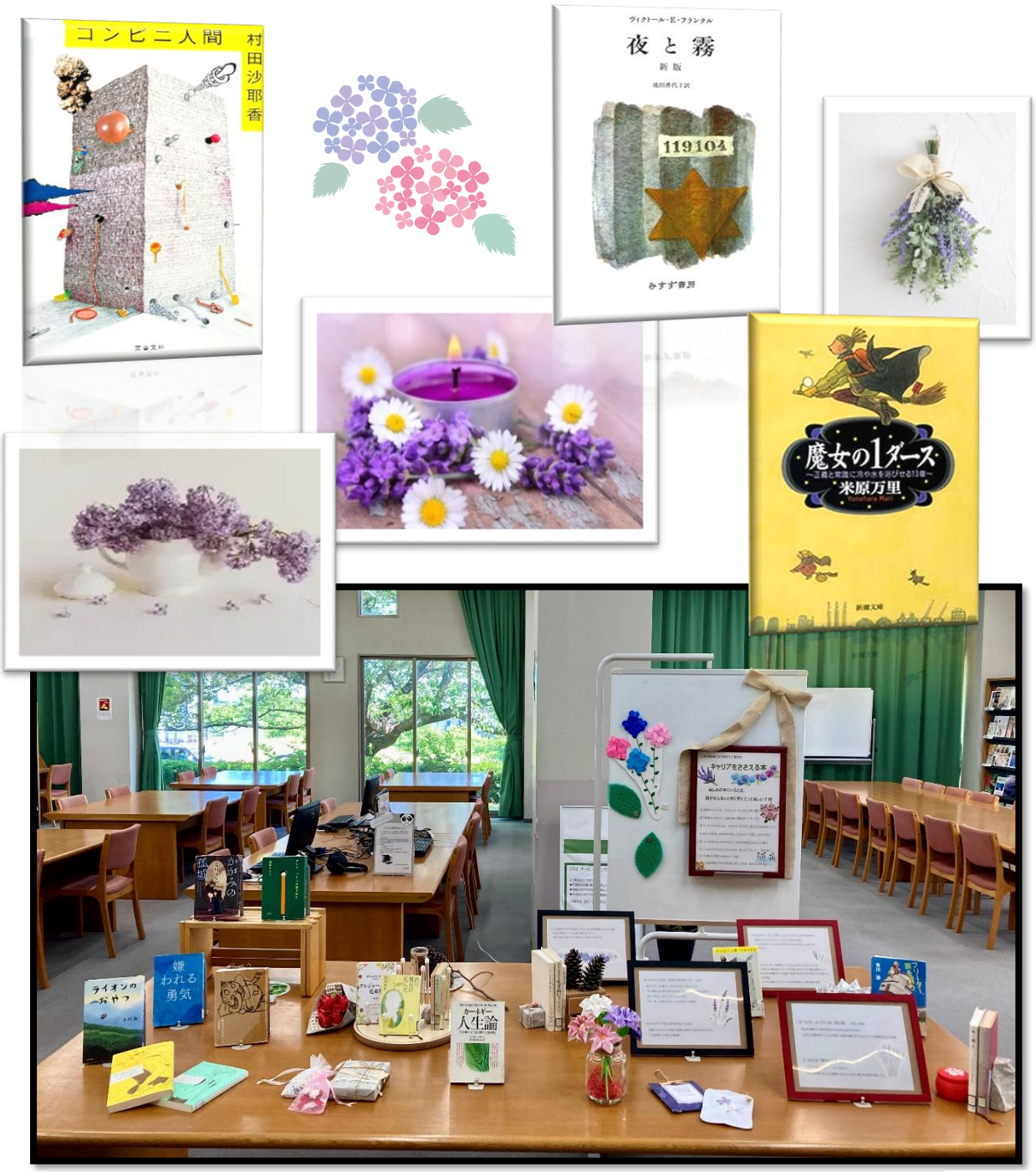


季節の絵本

季節の展示

舟橋先生展示

～人生の転機に立ち向かうＺ世代のキャリアを支える本～



苦しみの中にいるとき、前がみえないときに手にとってほしい本

文科省　おすすめ本

『ほたるいしマジカルランド』

寺地はるな 著　/　ポプラ社

大塚（おおつか）　達宣（たっのり）さん

(バレーボール選手)

2000 年 11 月 5 日生まれ。大阪府枚方市出身。小学 3 年生でバレーボールを始め、中学生までパンサーズジュニアで活動した。洛南高校に進学後は全国制覇を果たすなど主力として活躍、数々の表彰を受けた。早稲田大学に進学後も、攻守にわたり安定したプレーでトップレベルに上り詰め、在学中に日本代表に初選出されると、自国開催の東京 2020 大会にも出場した。パナソニックパンサーズ入団後も実力を発揮し、V リーグ新人賞やベスト 6 に選出された。日本代表としても VNL 銅メダル、パリ五輪の出場権獲得などで貢献。日本バレー界を牽引する一人として注目されている。

この本は、あるテーマパークで働く人々の連作短編集です。

登場人物は皆、悩みや葛藤を感じながら生きています。

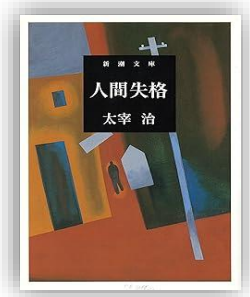
そういった感情は人間である以上、誰にでもあるもので、そのような弱みも誰にでもあります。この本ではそれぞれの人物に焦点をあてることで、その世界の主役のように見えてきます。人前に立つことの多い派手な人、裏方で支えてくれる人などさまざまな人がいてこの世界は成り立っていて、みんながみんな主役であると感じました

<メッセージ>

自分自身より優れている人を見て、劣等感を持ったりすることは誰でもあることだと思います。しかし、世界の中心はこの世の誰かではなく、あなた自身だと思います。自分自身の選択には責任を持たなければならないですが、自信を持って選択してほしいです。人に笑われようが、自分が正しいと思うことは貫くべきだと私は思います。また、自身の意見を持つことは、勉強でも、スポーツでも、人と関わるときでも大事なことだと思います。

皆さんもぜひ、この本を読んでみてください。

『人間失格』　太宰 治 著 / 新潮社文庫



国際地域学部　助教　/　川瀬　学

４月半ばの夜、ＮＨＫ　ＢＳの『国際報道 2026』という二ュース番組をみていたら、中国で「青年養老院」という施設に集まる若者が増えている背景とその実態について報じていた。その番組で取材に応じた青年は高校卒業後、音楽関係の仕事を探していたものの、定職をみつけることができず、その施設に毎日通っているようだった。飲食のアルバイトで、日本円で二万円ほどが毎月の収入だという。彼は「太宰治の『人間失格』を読んで絶望的な気分になりました」「わたしは自身のことを『終わったヤツ』だと思います」と笑いながら洒落たニット帽に長髪を束ねた姿で取材に応じていたのが印象的だった。

太宰は、トルコでいうノーベル文学賞作家オルハン・パムクのような日本のいわば国民的作家であろう。改めて読み返してみると『人間失格』は、たしかに「いまの自分」やそれを取り巻く社会的状況に絶望し、「破滅」の不安や恐怖に慄く若者の心に共振するのかもしれないと感じた。とはいえしかし、わたしは『人間失格』をただそれだけを描き出しているとは受け止めなかった。

「恥の多い生涯を送って来ました」と書き始められる小説の主人公による手記は、たしかに寄る辺なき個の時代を生きるわれわれに、近代的自己の抱える葛藤や懊悩を伝えているようでもある。それは、自己（わたし）の過剰さと、他者（あなた）の複数性に基づきつつも、友人や恋人あるいは家族との関係の確かさ／危うさ、揺るぎなさ／儚さ、留まり／移ろい、信頼／裏切り、誠実／欺瞞でもあろう。また、安心／恐怖、聖／罪、道理／不条理のみならず、美しい／醜い、貞淑／不貞、幸福／不幸とともに、都心／田舎、運動／静止、発展／停滞、さらに包摂／排除、順守／逸脱といった二項の境界や境面の流動性、言い換えると「答え」のなさも示唆しているように感じる。自他をめぐる通約可能さと通約不可能性に対して太宰は鋭敏なアンテナとセンサーを持っていたのだろう。そして、『人間失格』を「太宰治」を「文学」を成り立たせていた社会的、歴史的な文脈、背景、条件にも注目してほしい。そうすると歴史の連続性と非連続性を看取できるにちがいない。

学生たちには太宰のもう一つの代表作『ヴィヨンの妻』（新潮社文庫）の最後に書かれた一文のセリフを送りたい。「人非人（にんぴにん）でもいいじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ」。人非人とは、いわゆる人でなしのことである。太宰をただ希死念慮に苛まれた昭和の作家としてのみ捉えるのではなく、人間の営みそのものに対する信頼の表明、また《生》の喜びと苦しさを信奉するいわば「人間賛歌」なのだと『人間失格』や『ヴィヨンの妻』から感じた。ぜひ手にとって読んでほしい作品である。